

# 19世紀南アジアにおけるスーフィズムとタリーカの復興

平成 26 年入学  
派遣先国：パキスタン  
松田 和憲

キーワード：南アジアのイスラーム、スーフィズム、タリーカ、聖者崇敬、ムジャーヒディーン運動

## 対象とする問題の概要

ムジャーヒディーン運動は 19 世紀前半の南アジアにおいて大きな影響を与えたイスラーム復興運動である。この運動は「インドのワッハーブ派」と呼ばれ、18 世紀のアラビア半島において広まったワッハーブ運動との関連が指摘されてきた。しかしながら近年の研究により、スーフィズム（イスラーム神秘主義）や聖者崇敬を激しく糾弾したアラビア半島のワッハーブ運動とは異なり、ムジャーヒディーン運動はスーフィズムと親和性があり、聖者崇敬に関しても全否定しているわけではないことが指摘されてきている。ただ、ムジャーヒディーン運動の指導者であり、思想的中核を築いたシャー・ムハンマド・イスマールイルの諸著作からすべて分析され尽くしているとは言い難い。また彼の祖父で南アジア最大の思想家であるシャー・ワリーウッラーとの関連も自明のものとされており、両者の著作の比較から関連を指摘するものはほとんどない状況である。

## 研究目的

本研究の目的は、ムジャーヒディーン運動がスーフィズムとタリーカの復興に大きな影響を与えた可能性について検討することである。スーフィズムに関しては、シャー・ムハンマド・イスマールイルの諸著作が、1857 年のインド大反乱以降に活発化したイスラーム復興運動に大きな影響を与えた可能性について検討する。またタリーカ（スーフィー教団）については、旧来のタリーカとは異なり、ムスリムとヒンドゥー教徒との差異を明白化させ、後におこった宗教対立の根源がこの時代に形成された可能性がある。それらに加えて、ムジャーヒディーン運動の聖者崇敬に対する見方を検討することで、南アジア・イスラームの特質を明らかにすることができる。

これらのことを踏まえ、現代の南アジアにおけるスーフィズム・タリーカ・聖者崇敬の実態をパキスタンのパンジャブ州をメインに見ていった。

## フィールドワークから得られた知見

ラホールでは、南アジアにイスラームを最初に伝えた人物で知られるダーター・ガンジュ・バフシュ廟などでの参与観察、大学図書館やウルドゥー・バーザールにおける資料収集をメインに行った。聖者廟では多くの人でにぎわっていたが、セキュリティチェックも厳しく、過激派から「正しくない」イスラームとして攻撃されている実態を目の当たりにした。また他の聖者廟において、毎週木曜日にスーフィー・ナイトと呼ばれる宗教歌謡を聞ける行事にも参加した。この行事に外国人観光客も少なからず見に来ていて、聖者廟に観光資源としての役割があることも認識できた。資料収集においては 100 冊前後購入し、シャー・ムハンマド・イスマールイルの著作や彼の祖父のシャー・ワリーウッラーの著作のウ

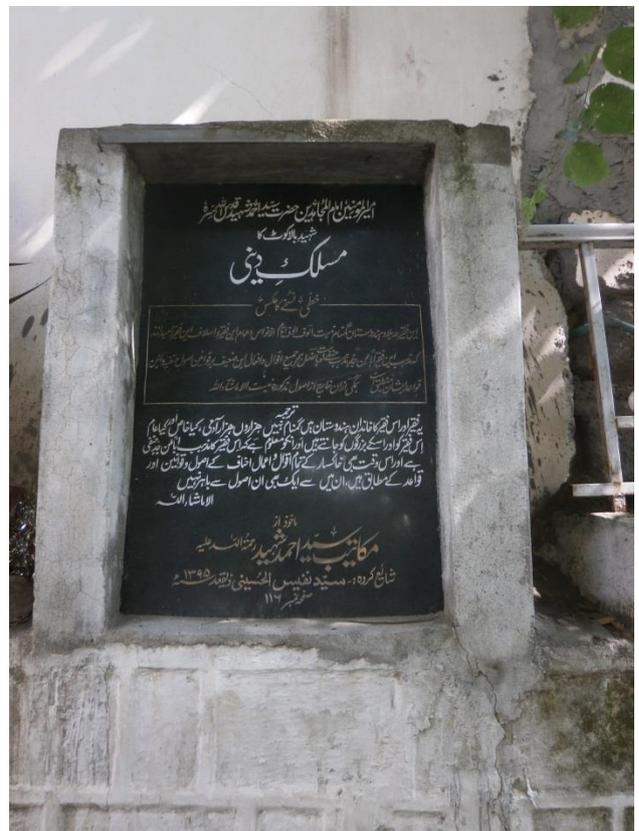
ルドゥー語訳なども 15 冊程度手に入れることができた。本屋の店員からはシャー・ムハンマド・イスマーイルの著作が発禁になっているという情報を聞くことができた。しかしながら他の店では彼の著作が購入可能であったため、このことに関する真偽は不明である。

ラホール近郊で、有名な聖者廟で行われていたウルス（スーフィー聖者の命日祭）に参加することもできた。このウルスではスーフィー聖者の詩の朗読をどれだけうまくできるかの発表会も行われていた。このウルスを運営する委員会の人に話を聞くこともできた。

聖者廟で有名なムルターンでは、中心街にあるバーザール（市場）のなかにも廟があり参詣する人が見受けられた。

ムジャーヒディーン運動の指導者であるシャー・ムハンマド・イスマーイルやサイド・アフマド・バレールヴィーたちが亡くなったバーラーコートにある彼らの墓は、廟にはなっていないものの、彼らの墓に参詣する人々がいる痕跡を見出すことができた。

### サイド・アフマド・バレールヴィーの墓①      サイド・アフマド・バレールヴィーの墓の紹介





バーラーコート の街並み



シャー・ムハンマド・イスマーイールの墓

### 今後の展開・反省点

今回のフィールドワークにおける一番の反省点は、聖者崇敬の実態やスーフィズムに関しては多くの情報が得られたが、タリーカに関する情報が余り得られなかったことである。

文献収集においては、出版地がラホールでない文献の入手が困難であったことから、ラホール以外での都市で文献収集する必要性を実感した。またパキスタンだけでなくインド側で出版されている文献に

も目を向けていきたい。またシャー・ムハンマド・イスマールイールの著作がなぜ発禁処分になっているのか詳しく聞き取る時間がなかったため、次回の渡航時に詳しく調査していく予定である。

展望としてはスインド州・カラチにおいてフィールドワークを行い、地域ごとに聖者崇敬の実態などがどのように違ってくるかを見ていくとともに、ムジャーヒディーン運動やスーフイズム、タリーカに対してどのような認識を持っているかも調査していきたい。